

奄美大島の教会巡り研修報告

－奄美の自然と教会を訪ねて－

奄美のカトリック教会の教会小史

1891 年（明治 24 年）～

奄美のカトリック教会の宣教の歴史は、大工の白井熊八氏（浦上出身大工棟梁）が鹿児島で島田喜蔵神父より洗礼を受けた後、県の仕事をする事になり、島田神父の勧めでフェリエ神父に先駆けて島民にキリスト教の教えを伝えたことに始まります。

「フェリエ神父は、鹿児島で洗礼を受けたという一人の貧しい大工から大島の住民がカトリック教を知ろうと望んでいることを告げられ、大島行きを頼まれた」（ハルブ神父の手記）との記述が残っています。

昭和初期の大戦前・大戦中に奄美の教会は厳しい苦難の時期を経験しました。この逆境の中にあっても神の恵みに信頼し、忍耐と犠牲の中に信仰を生き抜いた信徒たちの生きた証が、奄美の教会には今も生きています。

奄美の教会は、パリ外国宣教会と長崎教区の法人司祭による「布教」と教会創設により、名瀬周辺を始め龍郷、笠利と、北大島に次々とカトリック教会が誕生しました。

現在、奄美大島にあるカトリック教会の数は 31 カ所となります。

あまみおおしま観光物産連盟発行 奄美歴史探訪「幕末・明治」冊子より

鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センターでは、令和元年度、県内でも有数のカトリック信者を有し、数多くの教会が残る奄美大島巡礼の旅を企画した。鹿児島純心女子大学の教職員ならびにご家族の方々に呼びかけたところ、総勢 12 名の参加を得て、平成元年 9 月 6 日（金）から 8 日（日）の 2 泊 3 日で、北は奄美市笠利から南は瀬戸内町加計呂麻島まで、カトリックゆかりの地を訪れるという貴重な旅になった。途中 8 カ所の教会に立ち寄り、うち 2 カ所でミサが挙げられた。台風 14 号が東シナ海を北上する中、影響が心配された行程ではあったが、奄美の信者の方々の心からのもてなしを受け、それぞれの心に忘れがたい感動を残した巡礼の旅であった。

旅日記 1日目 9月6日（金）

午前9時30分、鹿児島空港に集合した巡礼団一行は台風14号の影響を心配しながら10時10分発のSKY381便の出発を待った。屋久島や種子島行きの便が欠航する中、私たちの搭乗機は「到着地の天候によっては福岡空港か鹿児島空港へ引き返す」という条件付きながら約10分遅れで離陸した。途中、大きな揺れが何度かあったが、機は無事に奄美空港に着陸、後方からは拍手も聞こえた。



荷物を受け取った一行は2台のワゴン車に分乗（1台は奄美の信者さんからお借りし、もう1台はレンタカーを利用）、空港からは至近距離の奄美パークを目指した。まずは2階のレストランで、それぞれ事前に注文していた鶏飯やエビフライランチ、ハンバーグランチ、鶏飯ラーメンなどを美味しくいただき、これから3日間の旅への英気を養った。



（奄美名物鶏飯）

奄美パークには、奄美の歴史や自然を紹介する博物館と、宮崎みどりさんが館長を務める田中一村記念美術館が併設されている。70歳以上の県民は入場料が無料と知らされ、何名かが恩恵にあずかった。

博物館では、地元の方々が親しみを込めて「アマジイ」と呼ぶ、まるで生きているかのような人形に驚き、一緒に記念撮影をする人も多かった。

奄美に移住し奄美の自然を描き続けた孤高の画家、田中一村の作品を集めた記念美術館は、浅い水を配した地形の上に高倉を模した独特な外観を有している。時あたかも、初めて里帰りした作品の特別展も開催されており、一村の細密な描写力と独特な世界観を堪能することができた。

奄美パークを出て国道57号線を南下、ときおりスコールのような雨に見舞われながらも、当日の宿「ホテルビッグマリン奄美」に到着。各々部屋に荷物を置いた後、



最初の研修場所である名瀬聖心教会へ向かった。

名瀬聖心教会は、奄美市役所や県の出先機関等が集中する名瀬の中心部に位置している。1922年（大正11年）レンガ造りの堂々とした聖堂が完成、レンガ御堂と呼ばれて親しまれたが、昭和20年4月の空襲により焼失した。現在の御堂は、昭和40

年に再建され、その威容は名瀬のランドマークにもなっている。

聖心教会では、教会の方々が部屋を準備してくださった。そこには、お茶やバンシロー（グワバともいう果物）、カシャモチ（サネンの葉に包んで蒸したヨモギ餅）なども並べてあった。この旅で地元の方々の温かいお心遣いに接する最初のおもてなしであった。

研修の最初のプログラムは、地元の信者様 榮ハル 様による信仰のお話しであった。

榮様は、この旅を企画していただいた末吉神父が龍郷の瀬留教会の司祭でおられたとき、教会の 100 周年記念事業実行委員長として献身的に尽くされた方と聞いた。

榮様は、お母様が敬虔なカトリック信者でいらしたことにより、ご自身も信仰の道に入られたことを熱い思いで語ってくださった。お母様は、自分が寂しい思いや怖い思いをしたときに、いつも神様がそばにいてくださるから悲しんだり寂しがったりする必要はないと諭してくださったり、決して豊かとは言えない生活の中にありながら、それとなく近隣の方々へ食べ物を届けられたりされるなど、本当に心優しい方であったそうである。ご自身も信仰の道に入られ、伝道師となられたご主人と共にカトリックの普及のために尽くされた。ご主人は後に希望の星学園の設立に関わられ、奄美では初めての障がいのある子どもたちのための施設を運営された。しかし、ご主人を病魔が襲い、10 数年に及ぶ闘病生活を送ることになるが、榮様はご主人を支えながらますます信仰を深められたそうである。我々の想像を絶する内容でありながら、時おり笑顔を見せながら話されるご様子に、一同深い感動を禁じえなかった。

予定の時間を過ぎて聖心教会を出たのは、既に 5 時を過ぎていた。次はここから車で約 5 分の古田町マリア教会を訪ねることになっていた。古田町マリア教会は、1958 年（昭和 33 年）献堂式を翌日に控えた聖堂で、里脇司教が 100 名に洗礼を授けて教会が誕生した。同年、コンベンツアル会によって聖堂が献堂され、1983 年（昭和 58 年）教会創立 25 周年記念事業として聖堂増築工事が完成し現在に至っている。モダンなドーム型の教会である。祭壇の後方や教会の壁には、大島紬のタペストリーが掛けられており、



まさしく奄美の教会という印象であった。このタペストリーを観るために、全国から見学者が絶えないというお話であった。また、ここには長年奄美で活躍されたゼローム神父様の遺品が展示されており、お人柄の一端を偲ぶことであった。お約束の時間を過ぎていたにも関わらず、松永正男神父や数人の信者様が、お茶やお菓子や、果物、名物の油ゾウメンなどを準備して待ってくださっていた。6 時からの夕食会を気にし

ながらも、せっかくのお心づくしを皆で有り難く味わった。

今夜の夕食は、名瀬の繁華街、屋仁川通りにある奄美の郷土料理店「喜多八」に予約してあった。少し時間を遅れての入店であったが、毎年の大学説明会で何度も利用していることもあり、純心学園はすっかりお馴染みとなっている。おかみさん心づくしの郷土料理と黒糖焼酎で、今日の旅の疲れを癒した。(冬瓜のアオサ汁は絶品！)心もお腹も大満足の一日目の旅であった。

旅日記 2日目 9月7日(土)

夜中に雨の音で目が覚めた。朝になったら止んでくれるといいのにといいながら、眠りと目覚めを何度も繰り返して、夜が早く明けるのを待った。6時には起きてカーテンを開け、窓の外を眺めた。しとしとと雨は降り続いていた。これが「簫雨」というものなのだろうかと思った。6時半に朝食会場であるホテルのレストラン「あさばな」へ急いだ。このレストランは朝食に鶏飯や鶏めんを提供していた。その他にも、奄美の郷土料理やサラダ・くだものなど多種多様なメニューが準備してあった。健康を考えたヘルシー料理が満載だった。

7時50分に集合場所のロビーへ。今回の研修旅行に参加者全員が元気に2台のミニバンに分かれて乗り込み、国道58号線を古仁屋港へと向かった。途中、住用地区では、マングローブの原生林が広がっていた。外は雨が降り続いていたので、車中より眺める。マングローブとは海水と淡水が混じる場所に育つ熱帯・亜熱帯地域の樹木群だそうで、このあたりは国内でも2番目の規模を誇る原生林なのだそうである。このあたりでは満潮時にカヌーで探索することもできるとのこと。いつの日かこの森のなかでマングローブカヌーを体験してみたいと思った。

古仁屋には加計呂麻島行きのフェリーの出る1時間ほど前に到着したので、ホノシ海岸へ立ち寄ることになった。この海岸は太平洋に面しており、海岸の石が打ち寄せる波に洗われて玉石と化し、波が引くときには、石が擦れて「カラコロ」という音が聞こえるのだそうだ。しかし、今日は海岸の駐車場に着くころには、雨がスコールのように激しく降り出し、駐車場から海岸へはまだ距離がありそうだったので、残念ながら古仁屋港へとまた引き返さざるをえなかった。

古仁屋港に着くと、フェリーのターミナルビルの前の駐車場に車を止め、10時20分発の「フェリーかけろま」に乗船する。雨は降っていたが、風はなく、船は揺れもなく静かに航行した。船から見える加計呂麻島の景色はとても美しく、雨にしっかりと

と濡れた入り組んだ海岸をおおう緑と、時折見える赤茶けた岩肌のコントラストが、自然の荘厳さを感じさせた。

出発して 25 分後に加計呂麻島の瀬相港に到着した。下船後、加計呂麻島で足となる軽自動車を 3 台借り、それぞれ末吉神父、藤尾先生、森中先生に運転してもらい、島内唯一の教会、西阿室教会へ向け出発した。港からすぐ山道に入り、狭くてくねくねした道を 20 分ほど進むと、東シナ海に面した西阿室の港が見えてきた。

西阿室教会

西阿室教会には、マリア観音像がある。この像は、加計呂麻島にカトリックの教えを広めるきっかけとなったものであるそうだ。もともとは昭和 18 年、日中戦争に従軍した池田之応氏が中国から持ち帰ったもので、それを西阿室集落の占者、禱（とう）直清氏が占いの霊力を受ける神として譲り受けた。ある日、禱氏の娘がみた夢の中で、このマリア観音像が「マリアでござる、マリアでござる。」と言ったそうで、これを聞いた禱氏は、奄美大島の名瀬で布教活動をしていたジェローム神父に会いに行き、西阿室での宣教をお願いしたといわれている。『カトリック奄美 100 年』という記念誌によると、1957 年に 21 家族 88 名が集団洗礼を受けて西阿室教会が誕生したそうである。今もこのマリア観音は祭壇の向かって右側に、イエス様の像の横に置かれている。

教会に入ると老夫婦が礼拝堂の後方に置かれたテーブルについていらした。本城（ほんじょう）信夫さんとミツさんご夫婦で、信夫さんは 89 歳、ミツさんは 88 歳。もう一人の信者さんを入れて 3 人で今この教会を守っているとのことだった。2 週間に 1 度、神父様が教会にいらっしゃってミサを行なって下さると語っておられた。このお二人を見ていると目には見えない神様の目に見える印だと切に感じた。11 時半からミサが末吉神父の司式のもとに行われた。旅の安全と西阿室教会に多くの信者が与えられることを祈りつつ、ミサにあずかった。ミサ終了後、ホテルに用意してもらっていたお弁当をこの教会でいただいた。ジェローム神父や教会の創立当時のことに思いをはせつつ、楽しく語らいながら昼食のひと時を過ごした。

1 時前には吞之浦にある島尾敏雄文学碑へ向かうため教会を発った。駐車場へ向かう途中、教会のすぐ近くを流れる小さな川を大うなぎが 2 匹、悠々と泳いでいるのを見てびっくりした。「この川のウナギは観光のため餌付けしてます 獲らないで下さい」との看板がガードレールに結び付けてあった。

西阿室教会から東へ 25 分ほど走ると呑之浦の島尾敏雄文学碑に到着した。

島尾敏雄文学碑

これは小説『死の棘』などで知られる島尾敏雄を讃える文学碑。建立の趣旨が以下のようになっている。

「この地呑之浦が島尾敏雄と廻り会ったのは、昭和 19 年 11 月、島尾は、第 18 震洋隊隊員 183 名を率い、呑之浦の入江深く、基地設営のために上陸した。島尾は、震洋特攻隊長としていつ捨てるかも知れぬ命を背負い、死への準備にいそむ日々を生きていた。押角国民学校に勤める大平ミホに出会ったのは、そんな戦争状態の中にあっても、時として訪れる平穏な一日であった。島尾の特攻出撃とともに、二人の青春はこの地に散るはずであったが、敗戦により思いがけない生を得た。

戦後、文学史上に残した島尾の仕事は、ここでの体験を抜きにしてはけっして語ることができない。三回忌を迎えたいま、島尾敏雄の業績をたたえ、それを記念するために、ゆかりの地呑之浦に文学碑を建立する。

1988 年 12 月 4 日

島尾敏雄文学碑建立実行委員会」

文学碑を通り抜けしばらく海沿いを歩くと、特攻兵器「震洋」の基地跡が見えるのだそうだ。雨のため道が悪く、基地跡まで行くことはできなかったが、痛ましい歴史の出来事にしばし思いをめぐらした。

文学碑の奥には階段があり、それをのぼると石碑があった。それは墓碑で「島尾敏雄・ミホ・マヤ この地に眠る」と彫られた石塔の裏面にはつぎのようなことが記してあった。

「この碑のなかには、島尾敏雄、ミホ夫人、長女マヤさんのお骨が納められています。呑之浦は、島尾隊長とミホさんにとっては出会いの場であり、恋愛の昇華とともに死を覚悟した聖地でありました。この地が、いま永遠のやすらぎの場となりました。

2008 年 3 月 26 日 墓碑制作実行委員会」

1986 年 11 月 12 日に 69 歳で島尾敏雄死去。それから 20 年間余、ミホ夫人は島尾の分骨を手元に置き、常に縁の広い黒い帽子の喪服姿で通したといわれている。2007 年 3 月 25 日 87 歳で死去。長女マヤはミホ夫人に先立って 2002 年に 52 歳で亡くなっている。ところでマヤさんは鹿児島純心女子高等学校に入学し、その関係で

島尾敏雄自身、純心とも交流を持つようになり、後年鹿児島純心女子短期大学で教鞭をとるきっかけとなった。マヤさんは、1983年には鹿児島純心女子短期大学の図書館司書に就職もしている。戦争下で死と直面しつつミホさんへの愛に悩む島尾敏雄の世界や島尾家と純心との縁にしばし思いをはせた。

雨も降り続き、時間も押していたので、瀬相港へもどることにした。瀬相港に着くとレンタカーを返し、14時40分発のフェリーに乗り込み、古仁屋港へ向かった。帰りも雨は降っていたが、船は穏やかに航行した。船中で、ジェラートのおすそ分けがあり、乾いた喉にととてもおいしかった。古仁屋港に着くと、すぐに駐車場のミニバンに乗り込み、古仁屋教会へ向かった。

古仁屋教会

古仁屋教会ではショファイユの幼きイエズス修道会のシスターの方々が対応してくださった。『カトリック奄美100年』という記録誌によると、古仁屋教会は1923年（大正12年）、米川基神父が巡回宣教を始め、池田藤吉伝道師が定住して公教要理を担当。1958年（昭和33年）、教会用地を購入して仮教会を建てたが、同年12月28日、古仁屋大火で仮聖堂と司祭館が全焼。1967年（昭和42年）コンベンツアル会により新聖堂と修道院が完成。「聖ジョルジオ」を保護者として献堂、現在にいたるのさうである。また教会に隣接して古仁屋信愛幼稚園があり、園長をされているシスター西山によると、現在71名の園児がいて、3名のシスター、4人の教師、それに英語や体育・空手など6人の講師でその園児たちの教育に携わっているとのことだった。教会では思い思いに祈りの時を過ごした。

古仁屋を15時40分に出て、本日最後の目的地、名瀬聖心教会へ向けて出発する。途中、奄美市住用観光交流施設「三太郎の里」でトイレ休憩をし、また田中一村の絵のモチーフにもなったヒカゲヘゴの群生を国道沿いに目にし、車を止めてその光景を写真に収めた。水かさの増した住用川とヒカゲヘゴの群生の対比が輝くばかりに美しかった。

名瀬聖心教会

17時40分に名瀬聖心教会に到着する。「なり味噌の作り方」の講習が予定されていた。すでに会場のカトリックセンターには講師の山田ヤエ子さんと大司昭子さんが待っていた。山田さんは昨日当センターで信仰の話をして下さった榮ハルさんの実の妹さんである。

なり味噌

ソテツの実のことを「ナリ」というのだそうだが、この実を砕いて水で洗い発酵、乾燥を繰り返してでんぷんにして、麴を加え塩と大豆などと熟成させてできたものが「なり味噌」なのだそうである。「なり味噌」は色々なものと相性が良く、米味噌などの粒味噌を加え魚や豚肉などと合わせると、ご飯やお酒のお供に最適だそう。長寿の島で知られる奄美の食生活を支えてきた味噌である。以下にそのレシピを載せる。

玄米 10kg ナリ粉 3kg 大豆 3kg 塩（種6kgに対して5合）

作り方

1. 玄米を2晩水につけておく
 2. 洗って引き上げる
大きなタライで玄米と粉を混ぜる
 3. 大ナベに水を入れて火にかけ蒸し器に敷き物を敷く
（イ）玄米だけを先に敷きつめる
（ロ）粉を混ぜたものを1段乗せ、火が通ったらまた1段と増やしながらかき混ぜながら蒸す
蒸しながらこうじ床を用意する
◎火を使う炊事場がよい
・床の上にブルーシートを敷き、ジュータン・アンピラ袋を縫い合わせたものを敷いてその上に蒸し上がったものを広げてさます
（ハ）残りの玄米だけを蒸して（ロ）に混ぜ合わせ手早くさます（だまにならないように注意する）
（ニ）すっかりさましてから敷き物でつつみ込み、毛布やふとんをかける（※ぬくもりが弱い時は湯たんぽを入れるとよい）
- （2、3日後）
4. きれいな金こうじが立ったら、大豆を煮て引き上げ、すっかりさめたらこうじに混ぜ合わせる
 5. 種6kgに対して5合の塩を混ぜ合わせてつく

貧しい家の人たちは味噌を作る余裕がなかったので、富裕な人たちが分けてあげていたという話をされていた。山田さんのお母さん（昨日の榮さんの話にもでてきた敬虔なカトリックの信者でもある）もご主人に隠れて、皿に味噌を入れ芭蕉の葉を被せて、となり近所の人びとに分けてあげていたそう。講習後お二人を交えて、お二人が作られた「なり味噌」や夏野菜の漬物等を食しながら、楽しい懇談のひと時を過ご

した。

ホテルに帰る途中「酒屋まえかわ」へ。奄美でもなかなか手に入らない黒糖焼酎「長雲」が手に入るという情報を藤尾先生が入手し、立ち寄ることに。この店には奄美の多種多様なお酒がたくさん並べてあり、研修に参加した多くの方々が「長雲」をはじめ奄美のお酒を買い求めている。

ホテルビッグマリン奄美

18時50分にホテルに到着。夕食は、雨も上がったのでホテルの屋上のビアガーデンで取ることにした。19時より、奄美の食材をつかった料理とお酒をみんなで和気あいあいと堪能しながら、奄美のキリスト教の歴史や戦争の歴史、それに食文化や人々の温かさを心に思いめぐらし、今日一日の豊かな旅の余韻に浸った。（文責 岡村）

旅日記 3日目 9月8日（日）

台風13号と直接の遭遇は免れたものの、雨、雨、雨。「月はくまなきをのみ見るものか」と兼好を気取っても、「雨の奄美も風情がある」と強がってみても、いけません、あの奄美の海と空が恋しい。

5時40分、いつもの習慣で早朝のウォーキング。ホテルを出て湾沿いに歩く。湾奥に広がる市街上空には黒い雲、しかし切れ間に青空が垣間見える。湾の入り口に視線をやると、立神が曙光を受けて黒いシルエットを見せている。その上空には薄雲をたなびかせて青空が広がっている。5時前に入港したクイーンコーラル8を左に見て1時間、昨夜のバイキングで食べ過ぎた身体に鞭を打つ。7時前、すでに沖縄へ向け出港したのか、船の姿はない。「今日こそは」と期待が膨らむ。

名瀬聖心教会でのミサ

8時25分、ホテルを出発。朝日がまぶしい。聖心教会は市街中心部にある。2017年夏に改修された白い教会は、歴史や宗教的な重みが形になっているとして、翌年に都市デザイン部門で大賞を受賞した。前庭には、南国の草花に囲まれて、奄美最初の使徒ヨゼフ・ベルナルド・フェリエ神父の胸像、浦和教会から里帰りを果たしたアンゼラスの鐘が置かれている。ケネディー大統領の葬儀ミサの際に使われたという祭壇を前に、末吉神父司式のミサが始まる。100名を超す参加者に「聖霊の働き」、「腰を据えて考える」ことについて話された。ミサの終わりには、森中シスターが巡礼団を代表して挨拶した。

10時35分、和光園教会へ。

和光園教会

国立療養所奄美和光園は、鹿児島で二つ目のハンセン病療養所として1943年に開設。全国に13ある施設の中で、入所者数が一番少ない療養所。祭壇の前で、旧職員の松原千里氏の話聞く。現在の入所者23名、うちカトリック信者が14名（男4、女10）。1947年9月にカトリック司祭4名が来園、翌年1月に特効薬プロミンを7名に投与したとのこと。パトリック・フィン神父（トラピスト修道会）のもと、1951年から3年間で73名が受洗した。さらに、「子どもをつくることのできる施設」としてアメリカからの支援を受けながら50名余りの子どもたちが病にかかることなく成長し、うち4名がシスターになったという。「ハンセン病になったからこそ、神様の大きなお恵みを受けることができた」と人生を前向きに生きた入所者のことを、胸の奥から絞り出すように語られる。松原氏の心に長年わだかまっていたのは「職員にも責任がある」という思い、それが氷解したのが2019年7月17日に発表された「日本カトリック司教団 ハンセン病に関わる謝罪声明」。その時の衝撃を「雷に打たれたような思い」と語られ、さらに中野司教の「謝罪声明に連動する祈り」の一節「ハンセン病からの回復者の方々をあなたのいつくしみの心で支え、献身的に奉仕した人々と、今も支え続けている人々を思い起こしています」を、言葉を詰まらせながら読まれた。外に出ると、真夏を思わせる日差しが肌に痛い。

大熊教会

1894年、奄美で最初の教会として完成。1938年、迫害によって聖堂解体。1953年、パトリック神父と信徒の奉仕作業の協力で鉄筋コンクリートづくりの聖堂が誕生。後に教会の保護者を「ファティマの聖母」とした。タム神父をはじめ信徒の方々に迎えられ、中に入ると額縁に入った司祭、修道者の写真が目飛び込んだ。白黒の古色を帯びた22枚の写真。みんな大熊出身者。見知った人の若いころの写真も並んでいる。歴史の重みが伝わってくる。ここで昼食、お茶や果物の準備ができていた。この二日間、行く先々で温かいおもてなしを受け、かつて5年間在住した自身の体験も思い起こされ、今更ながらに奄美の人々の温かい人情と、豊かな絆に感銘を受けた。車に乗り込む私たちの後ろから、見送りのチゼン（小太鼓）の音、思わず藤尾先生とシスター成願が六調踊り。笑いのうちに感謝しつつ教会を後にした。

芦花部教会

1929年、フェルミン神父によって聖堂完成。奄美の教会の中で戦前の姿をほぼ残

している唯一の教会である。入り口に「懐かしい思い出の芦花部カトリック教会」と題して、数枚の写真が掲げられ、軍国主義の中での受難の歴史等が綴られていた。1947年当時の教会の写真は現在とほぼ同じ形、「未永く保存されるべき建物かと思う」という一文が添えられていた。「教会と神社の鳥居が並んでいます（二つの神）」と説明をつけた写真もあった。教会の近くには観光スポットとして、「芦花部一番の碑」（心も容姿も「きよら」な美女バア加那の碑）。奄美の習俗の中に、カトリックがどのようにして根を下ろしていったのか、苦難の歴史が想像される。

秋名教会

13時15分、秋名教会着。昭和のカトリック排撃は、この教会にも及んだ。1934年12月、村の青年たちの襲撃で教会は破壊され、キリスト像が井戸に投げ込まれた。現在の教会は1951年カプチン会によって完成。米国軍政下にあった時代に、奄美の教会のほとんどが再建されている。秋名地区には、国の重要無形民俗文化財「ショチョガマ」、「平瀬マンカイ」がある。400年の歴史を持つ豊年祭で、毎年、旧暦の8月にアラセツ（新節）の行事として行われる。「ショチョガマ」は教会に並んで少し高い場所、「平瀬マンカイ」は、秋名湾の西岸の二つの岩礁で行われる。山や海への祈りは、奄美の自然への感謝でもある。

昨日、「なりみそ」（蘇鉄味噌）づくりを教えてくださいと榮さんをはじめ信徒の方々が、「なりがゆ」や「グアバ」など、奄美ならではのものを準備して待っていた。突然、肩越しに「先生！」と声をかけられた。40年ほど前、5年間勤務した大島高校で授業を担当したY君である。この後、彼や奥様との会話に夢中になり、巡礼団のメンバーと信徒の方々との交流の様子は、ほとんど耳に残っていない。言い訳をお許しいただきたい。

東シナ海沿いに北へ向かう。リーフ（サンゴ礁）に寄せる白波がまぶしい。リーフの内側には微妙に色を変えるエメラルドグリーンの海が広がる。奄美の海を堪能しながら、嘉渡教会を過ぎ、バショウ群生地、ソテツ群生地を右に、龍郷へ向かう。龍愛子（愛加那）の墓に詣で、隣接する西郷隆盛の謫居に入る。茅葺の狭い部屋で、愛加那の後裔という方の話を拝聴する。近くのこじんまりした、しかしテレビでも取り上げられたという土産品店で買い物。

瀬留教会

龍郷湾は深く入り込んだ静かな入り江である。「カトリック司祭 プイジュ師墓地の案内」板で車を止める。「自らを語らず全てを奄美に捧げた宣教師」とある。フラ

ンス人の彼は、1903年に瀬留に着任、以後19年間、奄美で司牧活動を行った。現在の聖堂を献堂し、息子の病気を心配した母親が帰国を求めても、それに応じず54歳の生涯を閉じたとのこと、小道を上った丘の中腹に墓地がある。「ブイジュ師之墓」と台座に刻まれた石の十字架像が立っている。

15時20分、瀬留教会着。右に鐘楼、左に守護者の聖ヨゼフの像が立つ。瀬留教会には、秋名、嘉渡（かと）、安木屋場（あんきやば）、龍郷（たつごう）、大勝（おおがち）、赤尾木（あかおぎ）の6か所の教会が巡回地として所属している。末吉神父も、2006年4月から2009年3月まで、3年間、瀬留教会の主任司祭を務められた。秋名と嘉渡、安木屋場と龍郷をそれぞれセットにして、土曜日の17時からと18時から、いずれかの教会でミサ、大勝と赤尾木は毎週日曜日の朝に、それぞれ実施していたとのこと。2008年、献堂創立100周年を迎え、12月に記念祭が行われている。この二日間、信徒の方々が口にされた「末吉神父様への恩返し」という言葉に、多忙な中、献身的に信徒の皆さんと関わってこられた末吉神父の一途な司牧活動が想像される。

大島紬村で、大島紬の生産工程について説明を受け、泥田染や実際に機を織る場面を見学。なるほど、大島紬の値段が高い理由に一同納得。

大笠利教会

16時55分着。大きな教会である。1915年に完成、1936年に聖堂が放火により完全消失。1948年に信徒の手で茅葺の仮教会を建築したが、翌年、放火で焼失。1951年、カプチン会によって木造の聖堂が完成、1972年、信徒によって現在の聖堂が完成。大天使ミカエルを保護者に献堂。庭には「笠利小教区カトリック宣教 百周年記念之碑」（2004年3月21日）が立つ。赤木名、手花部、平、喜瀬、佐仁、屋仁を巡回教会としている。

カトリック墓地を左に、あやまる岬へ向かう。17時を過ぎたが、日差しは明るい。あやまる岬は、笠利町の北東部、太平洋に突き出した岬、奄美十景の一つである。展望台に上る。180度のパノラマ、リーフが広がっている。東の水平線にはかすかに喜界島、眼下にはソテツのジャングル。右前方に土盛海岸、ブルーエンジェルとも称される美しい海岸、満潮のため、入り組んだリーフに囲まれて微妙に変化する海の色は見えない。それでも、一同、奄美の海と空に大感激、記念写真に納まる。

奄美空港に滑り込む。出発は定刻通り18時55分の予定。メンバーはお土産の物色に暇がない。2階の搭乗口へ向かう。笑顔の女性が、何かを話しかけそうな雰囲気

で目の前に。いぶかしく思ったのは一瞬、とっさに「〇〇さん？」と声が出た。「先生！」と答えた彼女は、40年ほど前、3年時に担任した生徒、それ以来の再会である。1日目、名瀬聖心教会で「信仰の話」を聞いた榮ハルさんの娘である。2日目、「なり味噌」づくりを教わったのは妹さん、その後の談笑の中で、榮という姓から「〇〇」さんの名前を出したところ、「私の姪で、姉の娘です」という思いがけない答えを聞いた。

出発までのわずかな時間、待合室の椅子に座り、助産師として海外青年協力隊に参加し各国を巡ったこと、シニア海外協力隊にも参加したこと、5年前に奄美に帰り、役場で働いていること、娘が純心女子高校に在籍していること等々、これまでのことを矢継ぎ早に語ってくれた。案内放送に急かされ、心を残して搭乗口へ。「久しぶりの再会に感激、わざわざ空港までに感激、充実した人生に感動」とメールを送った。

ほぼ満席の飛行機は、奄美空港を離陸、眼下はすっかり暗い。心地よい疲労感に睡魔が襲う。

今回の研修旅行は、人と人とのつながり、絆を体感する旅だった。大島紬の美しさが、一本一本染められた絹糸を織り上げたところにあるように、奄美におけるカトリックの歴史に触れながら、私たちは横糸（空間軸）と縦糸（時間軸）が織りなす様々な人生、その彩を見たような気がする。行く先々で温かく迎えてくださる信者の方々、その向こうに末吉神父との様々なかわり、時代の荒波の中で教会を維持し信仰を守り続けてきた共同体の皆さん、その共同体の一人一人と深く関わり導いてこられた多くの司祭、修道者たち、榮ハルさんがいみじくも語った隣人愛、奉仕の精神、無私の心、純粹にその人そのものを大切にすることを確認する旅だったように思う。

2年前に亡くなったMさんは、余命いくばくもない身で東京から母元に帰り、か細い声で「先生、お元気ですか」と電話をくれた。1日目、しばし一行から離れて、ようやく墓参りができた。その夜は、57歳のかつての生徒たち10人と久闊を叙し、楽しい一刻を過ごした。そして、思いがけなくもY君や、1学年下の榮さんとの出会い。「教育は子どもそのものが目的、何かの手段にしてはならない」が私の持論。であればこそ、14年前にカトリックの洗礼を受けるのにためらいはなかった。教師人生は横糸と縦糸が織りなす色模様、大島紬の「締め機（しめばた）」のように設計図通りには描けないが。



名瀬聖心教会



和光園教会



大熊教会



秋名教会



瀬留教会



大笠利教会



あやまる岬